
私と同類とはキスをした

郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と同類とはキスをした

【Nコード】

N7487E

【作者名】

郎

【あらすじ】

低い鼻、腫れぼったい両目、弛んだ体、ボサボサの髪。

貴方が好きな訳では、決して無いのよと、何度も何度も繰り返す言う。

弱々しく、男は頷く。少しばかり悲しそうにし、けれど、その鼻息を、確かに荒くしていった。

その様に笑みをこぼしながらも、私は内心溜息をつく。

こんな男に、私の初めての口付けを捧げるのかと思えば、ひどく淋しくなってしまった。

行きずりの男と、こうできるようにとしくんだのは私だけけれど。

行きずり？

いいや、この表し方には語弊がある。行きずりも何も、私は、この男に胸をまさぐられ此処に來たのだ。行きずりどころの騒ぎではない。

人生初の痴漢にあい、不快と共に驚いたのだ。鼻が低く、腫れぼったい両目に弛んだ体、ボサボサの髪。何一つとしてパツとしたところの無い私に、こんなマネをする人もいるものなのかと。そして私は都合悪く、その時妄想をしていたのだった。内容は、言えない。そんな類いの、妄想を繰り広げていた。

そこに感じた、不快な感触。私は思わず振り返って、その手の主の顔を見た。気弱そうに目を動かす、ひよろ長い背の若い男。美形などでは、決してなかった。けれどそれが、その風貌が、逆に私を引き寄せたのだ。

この男は、私の同類である気がした。むしろ、私よりも下かのような。

頼りなさげにうつろつく視線に、この男を可愛がりたいと、可笑しい思いが沸いてくる。

私の視線に気がつくと、男は青ざめて手をどかした。そして慌てふためいて、私から離れていこうともがく。けれど、混雑している電

車の中だ。停車をしている訳でもないのに、動くことは難しい。

不思議と自然に笑いが洩れて、私は男の裾を掴んだ。

ヒィ、と小さく悲鳴をあげたその男は、ガチガチと震えて縮こまった。私は何かがこみ上げてくるのを感じながら、優しく耳元でささやいたのだ。

キスぐらいならしてもいいよ、と。

「ぐらい」も何も、私は何一つとして、未体験であるのだけど。

そしてそんないざこざがあつて、結局のところは今に至る。

不恰好なこの男は、鼻息を荒くするばかりで、淋しげな目を向けるばかりで、一向に口を近づけてこない。

男は何もしゃべらず、だから私も、大して喋る事は出来ない。ただひたすらに、じれったい男の目を見つめた。苛立ちは、不思議と募らない。ただ、言いようも無しに淋しさがつのる。

好きなわけでは、決してない。

先ほどから、ずっと男に言っていた言葉を、口の中で反復してみる。そうしてから、気がついた。これは中々に残酷な言葉だ。今からキスをしようという相手から、好きでは無いと幾度も言われる。それは、一体どんな気持ちができるものだろうか。

私は、もう一度、改めて彼の眼を見つめた。ぴつたりと慎重に視線を合わせ、男の肩を震わせた。

男の目には、何か、色々な物が映っていた。この物の名前を、私は知らない。ただ、淋しそうだとか、悲しそうだとか、陳腐な言葉が浮かぶだけだ。

地面を蹴って、肩を掴んで。私は、いきなりに彼に口付けをした。ぬちゃ、と、気持ちの悪い音がたつ。初めての口付け、ファーストキス。全くもって、ほんの少しのロマンもない。

男の双眸が驚きに見開かれ、慌てて私から離れようとする。けれど私は意地でも離さず、執拗に口付けを続けていた。

しばらくたって、私は息がもたなくなつた。不恰好に息の音を立てながら、私は男から口を離す。乱れる息を整えようと、体も男から

離そうとする。

けれど、離れる事は出来なかった。

大した間もなく、私の口に男の口が重なったのだ。

さつき私がしたのは違う、がつつくような勢いのキス。先程よりも、もっと気持ちが悪い音がして、私の口に、男の舌が侵入してくる。

驚きから、抵抗しようとした私を、男は強く抱きしめた。

肩が痛む。男の体が汗ばんでいるのが感じられて、私は恐怖にすぐんでしまった。

けれど男の抱擁に、やましさは感じられなかった。子供が親にするような、べったりとした、甘えを求めるだけの抱擁。

けれど私は怖がっていて、それは男を傷つけたのだろうか。

侵入をやめない男の舌に、私は自らのそれを絡めた。

男の舌は勢いをまして、乱雑に秩序なく動き回る。私のそれも男のそれも、ただただ気持ちが悪いばかりで、漫画や小説で見かけるように、気持ちがよくも嬉しくもなかった。

気がつけば、男は泣いていた。

嗚咽をあげんばかりの涙を流しながらも、口付けのせいで声を上げれはしないのだろう。それが何だか哀れに思えて、私は男を抱きしめたかった。

けれど男の抱擁による締め付けのせいで、私の思いはかなわい。

汚らしい、男の泣き顔を見ながら続く口付けに、いつしか私も涙がこぼれた。

けれど、二人とも口付けは止めない。むしろ私はつよくがつつき、男もそれについてきたのだ。

息がつづく限りに続け、そして息がなくなれば、私達は、二人で揃って嗚咽をこぼした。

うわあああうわああと声を張り上げ、泣きじゃくる男と共に泣いた。

泣きじゃくりながらも、私達はキスをした。がつつくように貪るよ

うに、私達はキスをしあった。

（後書き）

何となく思い浮かぶままに書いたブツです。…ていうか自分のはい
つつもそつですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7487e/>

私と同類とはキスをした

2011年1月9日02時42分発行